2015 年 10 月 1 日発行

THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES

日本国際文化学会ニューズレター31号

http://www/jsics.org/

日本国際文化学会事務局
753-8502
山口県山口市桜畠3－2－1
山口県立大学
国際文化学部事務室内
Tel/Fax:083-928-3423
email:jsics@yamaguchi-pu.ac.jp

第14回全国大会（多摩大学開催）の報告

2015年7月4日（土）、5日（日）

『国際文化交流としてのグローバルツーリズム』

大会実行委員長　安田震一（多摩大学グローバルスタディーズ学部長）

2015年７月４日～５日にかけて多摩大学グローバルスタディーズ学部（湘南キャンパス）にて日本国際文化学会の全国大会を開催させていただき、誠にありがとうございました。大役を仰せつかり、その目標に向かって教職員が一致団結することが出来たような気がいたします。さらにお手伝いしてくれた早稲田大学の大学院生に感謝を述べ、本学の学生にとっては、学会とは何なのか、そして全国大会とはどの様なイベントなのか、その準備にどれだけ時間と尽力が費やされるのかなどが理解できたことは本学にとっては大きな収穫であったことに間違いない。次世代の若者が成長する機会を得られたことに感謝しております。

さらに本学の学生が文化交流創生コーディネーター（Intercultural Coordinator）資格の報告を聞き、資格そのものに対する興味が芽生えたことは資格制度導入に追い風になることは間違いないでしょう。こうした学び・経験は今後役に立つことでしょう。

寺島学長は自身の講演「観光立国への戦略的視座」に関して、日本国際文化学会に貢献できればと考えていると述べておりました。歴史を踏まえ、将来につなげてほしい、そして学会の今後の発展に期待するとエールを送られました。その後のパネルディスカッション「インバウンドツーリズム」では、観光・ホスピタリティーの分野がいかに幅広なのかが理解できたことであろう。さらに未だに政府主体で動き、一過性の大掛かりなイベントに観光やホスピタリティーが付随しているように解釈できたであろう。観光・ホスピタリティー分野も2020年の東京オリンピック・パラリンピックを経て発展することは間違いない。

情報交換会では、皆様の参加によってお互いの友好関係を再確認できたことでありましょう。大会中または準備期間中に「おもてなし精神」に欠けるまたは行き届かなかったこともあったかと思います。この点に関しては、この場を借りてお詫び申し上げます。皆様の協力および忍耐によって、全国大会を開催させていただき誠にありがとうございました。

基調講演（寺島実郎氏）

パネルディスカッション

研究発表の様子

常任理事会・理事会

2016年第15回全国大会、早稲田大学早稲田キャンパスにて開催 大会テーマ決定、共通論題・自由論題の募集を開始しました！

次期全国大会は、2016年７月16日㈯・17日㈰に、早稲田大学早稲田キャンパスにて開催されることが決定しました。常任理事・理事会は16日土曜日のお昼に開催予定です。

大会テーマも「紛争と融和における文化の役割－国際関係史から学ぶ」に決まり、共通論題、自由論題等の募集を開始しました。

●日　　程：常任理事・理事会：2016年７月16日㈯昼食時
全国大会：2016年７月16日㈯：シンポジウム、共通論題、自由論題、情報交換会など
2016年７月17日㈰：フォーラム、総会、共通論題、自由論題など

●場　　所：早稲田大学早稲田キャンパス　（〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1）

●宿　泊　先：ホテルサンルート高田馬場に各自でご予約ください。
（〒169-0075 東京都新宿区高田馬場１-27-７、電話03-3232-0101 JR高田馬場駅早稲田口から徒歩１分）
＊ご予約の際に、「日本国際文化学会全国大会での予約（担当：早稲田大学・都丸潤子）」である旨お伝えいただければ、優先的に予約することができます。お早めにご予約をお願いします。優先枠はありませんが、近隣にもその他のホテルが複数あります。

●大会実行委員長：都丸　潤子

●大会テーマ：「紛争と融和における文化の役割―国際関係史から学ぶ」

政治経済学・国際関係論研究の長い系譜をもつ早稲田大学での大会開催を機に、国際関係論の実証的アプローチを軸に、長いスパンで国際関係史における文化の役割を検討してみたい。文化の定義は生活様式・価値の体系としてや文化活動としてなど多様でありうるが、民族紛争・宗教対立のように「文化が戦争を起こす」側面が指摘されてきた一方で、逆に文化が権力者の独裁的政策や好戦的外交を抑制し、紛争の予防・緩和や紛争後の平和構築に貢献した事例や、紛争予防規範の形成と共有もみられた。本大会では国際関係史の実証研究から学びつつ、これまでの国際関係における文化の役割を再定義・再検討し、これからの可能性も探る形で議論を深めたい。想定される論点の代表例としては、いかなる条件のもとで文化が紛争に、また文化交流が融和につながるか、どのような文化要素が力の行使の抑止や集団間の架橋・平和構築に役立つか、文化交流の中で文化の多様性や普遍性がどう扱われてきたか、などである。

[共通論題の募集]　締め切りは2015年12月末日（必着）です。
若手会員も含めて、皆さまぜひご応募ください。

・共通論題は企画された特定のテーマに関して２～４名のパネリストもしくは報告者による報告と対話で構成するものです。時間は原則２時間です。申し込みは、Ａ４で１枚程度の企画書（共通論題テーマ案、司会者・報告者の候補者等を含めた企画案、申し込み代表者の氏名・現職・連絡先）を、2015年12月末日（必着）までに全国大会事務局（2016JSICS@list.waseda.jp）にご提出ください。
・今回は、通常どおりの自由なテーマ応募に加えて、大会テーマ「紛争と融和における文化の役割」に関連するテーマでの共通論題応募を特に歓迎します。ごく一例として、民族紛争・宗教対立・文化触変・文化交流・平和構築などの事例・理論研究、外交や国際関係における文化の位置づけの実証的・理論的検討などです。会員の皆様の積極的なご応募をお待ちしております。
・司会者及び申し込み代表者は学会会員に限りますが、報告者のなかに学会会員以外をふくめることができます。現在学会会員でない方は、申込みと同時に会員登録を行うことにより資格を得ることとします。

[自由論題の募集]　締め切りは2016年３月末日（必着）です。
若手会員も含めて、皆さまぜひご応募ください。

・自由論題は原則として個人研究発表ですが、内容により複数の発表者による発表も可とします。いずれも発表時間は質疑応答も含めて30分とします。質疑応答の時間が十分とれるよう、発表時間の目安を20分程度としてください。
・応募は日本国際文化学会の会員に限ります。ただし、現在学会会員でない方は、申し込みと同時に会員登録を行うことにより資格を得るものとします。
・応募は、氏名・現職（大学教職員・有識者・企業や団体・研究所等の場合は所属と肩書き、大学院生・学生の場合は在籍課程などを明記）・連絡先・自由論題発表題目・キーワード（３～５語）を冒頭に記し、発表要旨（40字×25行以内）をつけて、2016年３月末日（必着）までに全国大会事務局（2016JSICS@list.waseda.jp）にご提出ください。

[共通論題・自由論題応募について]

・応募いただいた場合、1週間以内を目途に受取確認メールをお送りします。受取確認メールが届かない場合は、お手数ですが、全国大会事務局あるいは学会事務局までご一報お願いいたします。
・応募いただいた共通論題については、2016年１月９日㈯開催の常任理事会で審議し、結果についてご連絡いたします。
・応募いただいた自由論題については、2016年４月初旬に開催する常任理事会で審議し、結果についてご連絡いたします。

研究会募集のお知らせ

研究会活動の企画運営にご活用ください。
・申請金額：10万円まで
・申請締め切り：2015年12月末日
・様式：学会ホームページよりダウンロードし、学会事務局宛に提出（メール添付あるいは郵送で）。

・結果の通知：2016年１月９日㈯開催の常任理事会で決定し結果をお知らせします。
・研究会の実施期間：2015年３月末まで。
・研究会実施については以下の３点を条件とします。
－共催として「日本国際文化学会」を明記する。
－学会メンバーの研究・交流・発信活動を支援するものとし、非学会員の講演等が主となるような場合は、そこに学会メンバーも参加をするプログラム（報告、対話、ラウンドテーブル方式による議論等、様式は自由）を用意する。
－開催前に国際文化学会ニューズレターおよびホームページの研究会開催コーナーにおいて周知することを了承いただき、また、開催後1か月以内に400～800字程度の報告書を提出し、これを学会ニューズレターおよびホームページで報告することとする。

11月14日、2015年度国際文化学関連学部・研究科のための第2回文化交流創成コーディネーター資格認定制度成果報告会・説明会を開催します

2014年度に登録いただいた８大学（９学部研究科）から応募いただいた４名の学部生・卒業生に資格を認定し、最優秀者には多摩大学で開催した全国大会で発表していただきました。

2015年夏の短期集中セミナーには登録大学から13名の学生が参加し、熱い６日間の研修を体験し、その成果を９月12日に発表しました。

これらの成果を報告し、参加登録大学を募ります。学会で歩みを進めてきた情報交換会も第７回目を迎えます。一昨年に引き続き、文化交流創成コーディネーター（ICCO: Inter-cultural Coordinator）資格認定制度に参加いただく大学のための説明会とします。会員のみなさまのご所属学部研究科でも、学生参加への道を拓いていただきます様、よろしくお願いいたします。

●日　　程：2015年11月14日㈯　14：00～17：00
●場　　所：青山学院大学ガウチャー15号館５階会議室

2015年夏のICCO 文化交流創成コーディネーター短期集中セミナーが終了しました

2015年９月７日㈪から12日㈯まで、龍谷大学にて開催された短期集中セミナーでは、登録大学から13名の学生が企画書をもって参加し、大学混成の３名一組のグループを編成してセミナーにのぞみました。参加者の所属大学は、青山学院大学、佐賀大学、静岡文化芸術大学、新潟県立大学、文教大学、山口県立大学、龍谷大学です。各地から京都に向けてワクワクしながら到着した学生たちの中には青春18キップを使って途中の地域性の変化を見ながらやってきた者もおり、６日間の合宿では意見や主張、学年や大学文化の異なる中での衝突や折衝という熱いドラマが展開されました。

セミナー日程の企画運営は、資格制度運営事務局の松居竜五事務局長により、素晴らしい内容とセッテイングで準備されてきました。セミナー一日目には平野健一郎先生による「国際文化学と文化交流創成コーディネーター資格」をテーマにした講演と質疑応答があり、二日目には３名一組のなかでそれぞれが持ち寄った企画書を説明し、その中から一つに絞って計画を練り直す作業が行われました。三日目と四日目は京都でのフィールドワークで街に出ていく学生たち。そこで彼ら・彼女らを待っていたのは、フィールドワークを受け入れてもらうための過酷な現実と思いがけない事実の発見

でした。それぞれの仮説や計画を柔軟に変更しつつ、解を求めて議論を重ね、五日目には発表に向けた取りまとめ作業に入りました。発表準備はどのグループも徹夜で取り組んだようです。六日目は10時から13時にわたり発表と質疑が行われました。

６日間を通して学会員５名が指導や助言に加わり、最終日の発表会には学会員14名が見守る中で、企画の斬新さ、客観的データによる裏付け、思考や論証の組み立て方、対人間関係等にもとづく文化のコーディネート力が問われました。発表後は資格審査委員会による議論が行われました。参加者はこれらの体験すべてをもとに、さらに内容の精度を高め、最終レポート作成に入ります。これらの参加者が、来年３月末までに文化交流創成コーディネーター資格認定制度に申請してくれることを期待しつつ、来年度にはより多くの学部生・大学院生たちがセミナーに参加してくれることを楽しみにしています。

2015年度文化創成交流コーディネーター資格短期集中セミナー日程

日　付	内　容		備　考
9月7日（一日目）	13：00～14：00 15：00～16：00 16：00～17：30 18：00	龍谷大学ともいき荘集合 オリエンテーション 平野健一郎氏講演「国際文化学と文化交流創成コーディネーター資格」(講演１時間＋質疑応答) 自己紹介および親睦会	
9月8日（二日目）	8：00～ 9：00 8：00～15：00 15：30～17：30 18：00	ともいき荘にて朝食 プロジェクトに関するグループごとの相談・決定 課題の発表・説明と修正（各グループ 15 分） ともいき荘にて夕食	この日のうちに三人で相談して課題と翌日以降の計画を決定する。
9月9日（三日目）	8：00～ 9：00 9：00～17：00 18：00	ともいき荘にて朝食 フィールドワーク1 ともいき荘にて夕食	原則として京都市内
9月10日(四日目)	8：00～ 9：00 9：00～17：00 18：00	ともいき荘にて朝食 フィールドワーク2 ともいき荘にて夕食	原則として京都市内
9月11日(五日目)	8：00～ 9：00 9：00～17：00 18：30	ともいき荘にて朝食後、龍谷大学深草学舎に移動 成果発表の準備 親睦会	龍谷大学深草学舎コンピュータを各グループに提供。パワーポイントによる成果発表の準備。
9月12日(六日目)	8：00～ 9：00 10：00～13：00 13：30	ともいき荘にて朝食 成果発表会（深草学舎和顔館 B106、各グループ 20 分＋質疑応答） 解散	龍谷大学深草学舎資格審査委員会による成果発表の審査を行います。

質疑とまとめ

学生によるグループ発表（六日目）

年報『インターカルチュラル』博士論文紹介記事の投稿を募集します

博士の学位を投稿締切日までに取得ないし取得確定したことを申告する会員は、年報『インターカルチュラル第14号』の博士論文紹介欄にその要約を発表することができます。入会申し込みと同時に投稿することもできることとしています。ご応募お待ちしております。

なお、投稿原稿の書式は次の通りです。

① 会員氏名（英字表記を並記する）
② 専門分野・研究機関（在籍のとき）
③ 博士論文表題
④ 論文提出先ならびに提出年月日
⑤ 博士号取得ないし取得確定した年月日
⑥ 論文概要　日本語で2,000字～2,150字（本誌２頁）の範囲でまとめてください。
　但し本誌のページ割りの都合で文字数の調整をお願いすることがあります。

ワープロソフトはワード等の一般的なものを使用してください。

・投稿締切日：2015年11月30日㈪（必着）　著者による初校・再校を実施します。
・掲載誌発刊：2016年３月
・投稿原稿送信先：年報編集委員会あて　intercultural2015@gmail.com

第14回全国大会（多摩大学開催）共通論題・自由論題発表の報告

それぞれのセッションで代表やモデレーターを務めた会員からの報告です。

[共通論題報告]

共通論題①　新自由主義的世界における多文化主義とナショナリズム―政治理論的検討

白川　俊介（九州大学比較社会文化研究院特別研究員）

本セッションの目的は、新自由主義的なグローバリゼーションが進行する世界におけるナショナリズムや多文化主義のあり方、あるいはそれらの意義と限界について、主として政治理論・哲学の観点からの検討を試みることにあった。最初の報告者であった森敦嗣会員（九州大学）は、「新自由主義路線における多文化主義の意義―キムリッカによるネオリベラル多文化主義の分析と考察」という論題で、新自由主義的傾向の中で単文化主義の思想潮流に変化が見られることに鑑み、いわゆる「ネオリベラル多文化主義」についての評価をウィル・キムリッカの議論に基づいて行った。　続けて栗林大会員（中央大学）は、「社会的希望」と多文化主義―ガッサン・ハージによるネオリベラル多文化主義批判から」という論題で、ハージの「希望の分配メカニズム」という概念を手がかりに、ハージの国民国家の機能の喪失論およびその多文化主義批判に基づき、新たな共生への道筋を探究した。最後に、白川俊介会員（九州大学）は、「マルチナショナルな世界におけるネイション間の正義の問題―規範理論的一考察」という論題で、多文化主義的政策が適切に行われる条件としての再分配政策の機能が新自由主義的グローバリゼーションによって切り崩されている現状に鑑み、それをどのように立て直すべきかという点について、デイヴィッド・ミラーの議論を手がかりに試論的に論じた。各報告はお互いに有機的に繋がっており、時間の都合上難しかったが、報告者同士で意見交換ができれば、さらに有意義なセッションになったであろう。各報告者とも、得られた知見をもとにさらに研究を深めていく所存である。最後に、本セッションのコメンテーターを務めて頂いた高橋良輔会員（青山学院大学）に感謝するとともに、誠に多くの聴衆の方々に足を運んで頂いたことに感謝申し上げる次第である。

共通論題②　「性の規範を問いなおす―“アブノーマルな”セクシュアリティからの逆照射」
吉岡剛彦（佐賀大学／法哲学）

本セッションでは、現下の社会において周縁化され「ふつうではない（アブノーマル）」と見なされている少数派の「セクシュアリティ」のありようから、逆に主流派＝多数派の「性文化」に特有の“狭さ・歪み・偏り”を浮き彫りにしようと企図した。まず、提題者の吉岡から、企画主旨と共に、アダルトビデオに象徴される「健康で若い男性がペニスを女性のヴァギナに挿入することがセックスだ」という男性優位の性観念を相対化すべく、障害者や中高年の性、日本古来の性習俗「よばい」を総論的に論じた。つぎに、山下梓（弘前大学／LGBTI論）は、セクシュアル・マイノリティ（インターセックスやトランスジェンダー、同性愛・両性愛者ら）の国際的な当事者運動について、その運動体の名称（換言すれば当事者の自称）の時期的変遷などをたどりながら、性的少数者にかんする世界的な認識の拡がりと深まりを論じた。つづいて、東優子（大阪府立大学／性科学）が、インターセックスやトランスジェンダーについて「病い（治療対象）とは見なさない」という脱病理化という国際的傾向が近時強まっていることを紹介しつつ、逆に性同一性“障害”という呼称が広く膾炙し、むしろ当事者自身も「障害者」というアイデンティティをみずから身にまとおうとする場合が少なくない日本の特異性を指摘した。さらに、土屋明広（岩手大学／法社会学）は、文科省が最近ようやく「性同一性障害」など性的少数者の児童生徒に対する対応を呼びかけたが、今なお性教育をはじめ教育カリキュラムの面で、性別二元論や異性愛主義の雰囲気が根強い学校現場の実状を批判的に論じた。最後に、山本弘（星薬科大学／日本法制史）が、日本史を遡りつつ、過去にはいわゆる「男色」に対する親近性や寛容性が存在していたことを摘示した。

共通論題③　「伝統」は現代にどのように生きるか―実践的取り組みを通して
鈴村　裕輔（法政大学国際日本研究所客員学術研究員）

今回、われわれは、建築、音楽、世界遺産を対象に、一般的には伝統的と見なされる事象がいかにして現在の日本の社会の状況に適応しているかを検討した。最初の報告者であった鈴村裕輔（法政大学）は「「伝統」はいかに評価されるか―ユネスコ世界遺産を中心に」と題し、当初は日本人の関心を惹かなかった世界遺産が近年注目を集めていることを手掛かりに、世界遺産が訪問先としての価値を保障する「お墨付き」の役割を果たすとともに、日本人と外国人の双方にとって「未知の世界」を「既知の世界」へと拡張する機能を有することを考察した。2番目の報告者であったマクイーン時田深山氏（東京藝術大学／沢井箏曲院）は、「邦楽における伝統の維持と新しい伝統の創造―箏曲を取り上げて」という論題により、伝統的な分野と捉えられる邦楽が演奏者、作曲者、聴衆の関係の中でどのような新たな試みを行っているかを、演奏家でもある自身の経験を紹介しつつ検討した。最後の報告者のブノワ・ジャケ（フランス極東学院）は「「日本建築」は日本的か？―その伝統性と現代性」と題する報告により、「現在の日本には日本建築はあるのか」という問いから出発し、丹下健三、篠原一男、みかんぐみなどを対象として、各時代の最新の技術や意匠と、日本の伝統的な美意識や建築技術との融合を通じて作品を生み出していることが検討された。上記の報告により、伝統的と称される事柄が、言葉の響きが生み出す静的な印象とはことなり、周囲の状況に適応しようとする試みを通じて絶えず変化していることが示された。また、質疑応答でも参加者から重要な質問や指摘が行われ、本パネルは盛況のうちに終了した。パネルの円滑な進行に努められた大会実行委員会の尽力とあわせて、謝意を表する次第である。

共通論題④　「文化を紡ぐ人材」が、これからの社会にもたらすもの

斎藤　理（山口県立大学准教授）

今回のセッションにおいては主として以下の３つに論点を置きつつ、各研究成果を持ち寄り、考察を深めていった。

１）文化を紡ぐことの意義を再確認する
２）文化を紡ぐ人材の育成手法について
３）同人材の社会貢献のあり方について

１）の項については、木原誠（佐賀大学）、高橋良輔（青山学院大学）がそれぞれ、「周縁学」、「コスモポリタニアン」をキーワードとしつつ、同人材の主体性とその周りに拡がる領域の問題に言及しつつ、同人材が他者との関係性を構築しつついわば文化的結節点として活躍すべきことを明快に論じた。

２）の項については、岩野雅子（山口県立大学）、北林健二（山口県 県史編さん室）がそれぞれ、「サービスラーニング」、「地域史学習プリント」を題材に具体的な学習手法を提示し、教育環境を地域社会に拡張させる可能性を示唆した。

最後に３）の項について、小笠原伸（白鴎大学）、斉藤理（山口県立大学）が、「ソーシャル・ビジネス」、「コモンズ・モデル」を挙げながら、社会の受け皿としての態勢が未だ十分ではなく、これを並行して考えていくことが、人材の活躍機会を広げる上で不可欠である点を指摘した。

終盤のクロストークは十分に時間確保できなかったものの、オーディエンスからの指摘も踏まえ、一連の人材育成プランが具体的なフェーズに至った際に顕在化するであろう諸問題について考察した。とりわけ重要な指摘は、同人材と社会（共同体）との距離感の取り方についてであり、既存のコーディネーター像に絡め取られることなく、むしろ国際文化学を基軸とした新たな領域横断的なフィールドを自ら創出していく能力が重要であることが確認され、この点のさらなる探求をまた今後の課題としたい。（敬称略）

[自由論題報告]

自由論題A　モデレーター：川村陶子

本セッションでは、国際関係を文化やアイデンティティの視点から分析する三つの報告が行われた。

第一報告「『国際貢献』の軌跡―冷戦後の日本における国際関係認識の一断面―」（大山貴稔会員）は、「国際貢献」を日本独自の国際関係認識を表す概念ととらえ、各種資料の用語使用状況から、その生成・流布・変容の様相を検討した。そして、「国際貢献」が1990年代前半期に国家的側面と市民的側面の二面性をもつ概念として盛んに用いられたこと、同概念の展開は国際文化論の研究事例としても意義深いことを結論づけた。

第二報告「フィラデルフィア万博の機械館に見るアメリカのソフト・パワー」（福田州平会員）は、1876年のフィラデルフィア万博において機械類の展示に注目が集まったことに着目し、英・独・仏・米の機械館を比較するとともに、アメリカの展示内容を分析した。最後に、アメリカがコーリス・エンジンをはじめとする機械類の展示に注力したことについて、同国は「機械技術という文化の『ソフト・パワー』を発揮したが、これは平和的な力のみを発揮したという訳ではない」との総括がなされた。

第三報告「アンスティチュ・フランセの設立と影響力外交」（岡眞理子会員）は、フランスの対外文化活動の最新状況を、フィールドワークと関連文書の分析から明らかにした。岡会員は、歴史的背景をふまえ、海外に出先機関をもつ新しい公設組織アンスティチュ・フランセの設立経緯と、その試行期間の活動評価を詳細に検討した。その上で、21世紀フランスの「影響力外交」は国家主導型パブリック・ディプロマシーのフランス版ともいうべきものであり、対外文化政策の今日的あり方について研究を深める必要性があると主張した。

言説分析、史料分析、政策研究と、各々アプローチを異にした三つの報告は、国際関係の文化

的分析のゆたかな広がりと可能性を示すものであった。いずれの報告にも多くの参加者から質問やコメントが寄せられ、時間いっぱいまで活発な討論が行われた。

自由論題B　モデレーター：鳥飼　玖美子（順天堂大学特任教授）

本セッションでは「留学」に関する二つの発表がなされた。

一つ目、Brian J. English, Ph.D.（多摩大学グローバルスタデイーズ学部教授）の“Preparing Japanese University Students for Study Abroad”English氏は英語による発表で、日本人大学生の留学の現状、海外留学と異文化適応の問題を概観した後、留学の成否 を決めるのは異文化コミュニケーション能力および海外の大学という新たなアカデミック環境への適応であることを指摘した。そして日本人学生にとって特に課題となるのが、言語文化（Lingua-culture）、友人のネットワーク、ソーシャルネットワーキング、そして教育文化（Edu-culture）であると説明。 その上で、大学による出発前のオリエンテーション、および出発後のオンラインによる支援が有効であることを具体例をもとに提示した。

二つ目の発表は小林葉子（岩手大学人文社会科学部准教授）の「海外語学体験からの脱却：教養系分野による摸索と課題」。小林氏は、海外留学の意義を認めながらも、文部科学省と産業界は高校と大学に対し、産業界の価値観に基づく数量的成果を求めつつあり、産業界を中心に求められるグローバル人材育成を最優先させていることを批判する。その上で、英米文学・英語学研究者たちがどのように「国際文化交流」を実施しうるのかについて考察した。一例として、英文科カリキュ ラムに観光科の要素を取り入れた観光ホスピタリティ研修を紹介。努力に敬意を表しつつも、観光学など実学を軸としたカリキュラムを国際文化系学科が進めることで、結果として人文教養系学問領域の存在価値を脅かしてしまう可能性についても言及した。海外留学を軸に、「グローバル人材育成」、「留学とジェンダー」「大学における人文社会科学系のあり方」まで議論が発展した為、論点が拡散したきらいはあるが、重要な問題を提起した発表であった。

二つの発表は、国際文化を「海外留学」という切り口から分析しており、大学教育における異文化理解教育のあり方を再考させるもので あった。

自由論題C　モデレーター：木原　誠（佐賀大学教授）

本セッションでは、以下二つの発表がなされた。

1）越智淳子（早稲田大学アジア研究機構アジア・北米研究所）「大岡信の海外連詩に関する考察―参加詩人それぞれの文化背景をめぐって」

2）松居竜五（龍谷大学国際学部）「ハーバート・スペンサーと南方熊楠」

越智会員は、昨年の第13回全国大会で発表した詩人大岡信の国際性に続き、「彼の国際的活動の中でも、特筆すべき海外詩人との連詩に焦点を当て」、発表を行なった。そこで浮き彫りにされたものは、大岡著「うたげと孤心」で提示された、歌人の「孤心」（個性）と「うたげ」が有する集団意識、その間で発生する緊張関係の問題だった。日本の連歌の伝統においては、作家の個性と集団が生み出す＜超個性＞は相互補完されて、そこにひとつの「座」という即興的な公共空間が生まれる（大岡がいう「孤心のきわまり」）。ただし、連歌（連詩）を海外で行うと、個と集団は対立し、そこに緊張関係が生まれ、それを「自我の屈辱」（オクタビオ・パス）と感じる詩人も出てくる。だが、地道な「うたげ」の海外の実践により、「個」に対する「集団」への意識も徐々に理解されていくという。異文化理解に対するひとつのモデルを示す優れた発表であった。

松居会員は、「今日でもなお、思想家としての評価が難しい」ハーバート・スペンサーが前期の南方熊楠に与えた絶大な影響と後期の反発についてであった。発表の前半では、スペンサーが説く「進化論」が大いに誤解されたまま受容された経緯を確認しつつ、彼の思想を正しく理解した南方のすぐれた才能を貴重な根拠資料を提示しながら実証的に根拠づけていった。そのあとで、スペンサー批判に向かう南方の科学者としての志向（帰納的思考）、すなわち「生物だけではなく宇宙全体に行き渡る法則としての『進化』を、さまざまな現象に演繹的に

適用しようとするスペンサーに対する批判」を前景化していく。短時間で、この壮大なテーマを説得的に根拠づけていく発表、その流れは圧感であった。

一見、ジャンルの異なる二つの発表には関連性はないように思わる。だが、１）「個」とそれを超えて働く＜超個性＞の問題（連歌の「座の感覚」とスペンサーの「超自己」VS「南方曼荼羅」）、２）フェノロサを媒体者に一方が俳句の西洋受容（エズラ・パウンド）、他方がスペンサーの日本受容（南方熊楠）という東西文化交流のあり方が明示されているという意味で、二つは密接に結びついている。このようにジャンルの垣根を超えたテーマを一本の糸で結ぶことを可能とする学、国際文化学の存在意義とその奥深さを改めて知らされるセッションだった。

自由論題D　モデレーター：小林　文生（東北大学教授）

本セッションでは、以下の４つの報告が行われた。

１）曹臻会員（大阪大学大学院人間科学研究科グローバル人間学専攻博士後期課程）「クールジャパン戦略」の可能性と限界―東アジアにおける若者の意識調査から」。2011年に経済産業省が発表した「クールジャパン戦略」が持つ「国家イメージ」アップという付加価値に着目して、これが東アジアでどのような影響を及ぼしているかを、日本政府観光局のデータに基づく訪日観光客数の動向の分析、及び報告者が実施した中国、台湾、韓国の若者へのアンケート調査、インタビュー調査結果の分析に基づいて明らかにしようとする意欲的な調査報告。政治的戦略、文化内容、国家イメージの関わりについて今後さらに議論が深められることを期待したい。

２）片岡悠平会員（国立政治大学コミュニケーション学部テレビ放送学科修士課程）「『文化的近似性』にみる台湾の日本文化再生産―『哈日族』の出現から『流星花園』製作に到るまで」。台湾における日本的表象を持つ漫画やドラマ等の再生産とその受容の状況について、例えば日本の人気漫画『花より男子』を原作にした台湾ドラマ『流星花園』のように、単なる受容ではなくその再生産がなされる過程においていかなるメカニズムが働くのかを考察する。その際に、「文化的近似性」を分析概念として、漢字文化圏出身者に特徴的に見られる好みと傾向に着目すると同時に、日本的表象の先進的イメージが重要な意味を持つことを指摘する。「近似性」の内容をより詳細に分析することによってさらに豊かな議論となることが期待される。

３）井出晃憲会員（国立民族博物館共同研究員、文教大学湘南総合研究所客員研究員）「博物館展示による少数先住民の活性化」。ロシア極東のアムール河流域に暮らす少数先住民を主体とするシカチ・アリャン村が存亡の危機にあるのを、村に点在する古代岩画群の拓本採取等に基づく展示等の観光事業によって村おこしする活動の紹介。過去20年にわたる支援という信頼の背景に支えられてこそ成立しうる活動であり、遺跡の芸術性と村民の文化的アイデンティティへの配慮に基づく考察は、存在するヒトを中心に据えつつ、それにまつわる時間と空間をどのように描き、現在と結ぶかという壮大な試みの軌跡であり、インターカルチュラルという視点への大きなヒントを感じさせる。

４）牧野由香里氏（関西大学総合情報学部教授）「対照修辞研究の文化差を超える十字モデル漫画教材の開発」。対照修辞研究の基礎となる言語学及び心理学の理論によって示される西洋と東洋の異なり、すなわち〈分析的／包括的〉〈二分／弁証〉などの違いが、十字で示すことによって解消される、言い換えれば、十字の横軸は意味構成（論理的思考）を、縦軸は価値創造（問題解決）を示し、具体的な対象物から抽象的な概念へと発展するプロセスが「知的構築の十字モデル」とされる。これがスピーチや論文作成等の言語活動への支援となる仕組みを、十字モデルに則った漫画教材で提示するといういわばメタ教材の開発の紹介で、興味の尽きないものである。

自由論題E　モデレーター：馬場　孝（静岡文化芸術大学教授）

本セッションでは、以下の四つの発表が行われた。

１）齋藤絢（名古屋外国語大学外国語学部日本語学科助教）「韓国社会における民衆歌謡の伝承性について―民主化運動前後から現在までを中心として」

２）倉真一（宮崎公立大学人文学部国際文化学科准教授）「外国人移民に映し出される強いネーションへの願望―保守系オピニオン誌『SAPIO』における特集記事の分析」
３）大形利之（東海大学国際文化学部国際コミュニケーション学科教授）「IS（イスラーム国）とインドネシアとの関わりについての一考察」
４）奥村みさ（中京大学国際英語学部教授）「シンガポールにおける文化遺産政策とツーリズム―英語圏文化を包摂したナショナル・アイデンティティの構築」

齋藤会員は、韓国社会の民衆歌謡と集団意識形成の密接な関連を歴史的にたどり、両者の関係が民主化以降、情報技術の発展と世代交代という要因を背景に、歌い手と聴き手が分化し固定化する方向に大きく変容しつつある状況を、近年のデモ空間の臨場感あふれる描写を交えつつ分析し、民衆歌謡の伝承性という問題に実証的かつ共感的な検討を加えた。

倉会員は、保守系オピニオン誌『サピオ』創刊以来25年間の外国人移民特集記事を７期に区分し言説分析を行い、各期のキーワードの変遷を通じて、ナショナル・アイデンティティの揺らぎや不安、強いネーションたらんとする願望など、グローバル化という文脈でのナショナリズムのメディア言説空間への反映を、鮮やかに剔出した。

大形会員は、「イスラーム過激派」はインドネシア社会にほとんど受け入れられていない点を周到に確認したうえで、カリフ宣言を行ったIS（イスラーム国）の勃興がインドネシア過激派組織にもたらした衝撃と分裂について、メンバーの構成や移動、日本人人質殺害事件での関連サイト発信内容など、第１級の情報と知見を明快な枠組で整理し開示した。

奥村会員は、シンガポールでHeritage Tourismが重視され、旧植民地時代の文化遺産振興に拍車がかかるのはなぜかを問い、住民間の意識の乖離を孕みつつも実は植民地期の歴史的建造物こそ共通の愛郷心の対象であり、二重言語政策の思わぬ帰結として、英語圏文化を包摂するナショナル・アイデンティティが構築されつつあることを見事に読み解いた。

いずれも充実した研究成果をベースとする報告であり、フロアから質問が相次ぎ、活発な議論が交わされた。

自由論題F　モデレーター：安田　震一（多摩大学教授）

自由論題Fは観光をキーワードとした「イギリス・コーンウォール地域の景観に対するグローカルな価値付け―景観ツーリズムの事例より―」（堂下会員）、「日本的サービス」の解釈―在中国日系旅行会社の職場を事例として―（田中会員）、「動詞抽出調査法をベースとした観光まちづくりの可能性について」（斎藤会員）およびホスピタリティに関する「日本人高齢者のタイへの国際引退移動と生活位相選別」（吉田会員）の４つの研究発表が行われた。

詳細に区分すると、景観ツーリズム、観光まちづくり、文化観光、日本的サービスなど最近よく耳にするキーワードや国際引退移動、ロングステイなど日本および日本人にとってどれもグローカルな視点から興味深いテーマであった。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて今後、様々な分野を巻き込んだ大きな意味での観光は、インバウンド・ツーリストに対するホスピタリティ、今後ハイエンドのリピーターを獲得出来るかが問われる。そこで、文化的景観、景観ツーリズムは、四季を活かした誘致方法など日本にとって大きなアセットになることが考えられる。また、サービスの質、日本的なサービスとは何なのかなどは今後問われる課題である。

「日本人高齢者のタイへの国際引退移動と生活位相選別」は引退生活をタイで過ごすことに関する発表であり、この現状はシンガポールのメディカル・ツーリズム、未病対策として盛んに行われていることとは異なるが、日本に於いては引退者対象と言うより、海外から医療と温泉療養などに置き換えて今後大いに検討するべき分野である。

観光まちづくりは、最近良く耳にするキャッチフレーズである。まちづくりを実施に取り入れた活動に関する報告が斎藤氏の発表であった。まちづくりと言いながらも、むしろ地域文化を均質化する弊害があり、来訪者と地域コミュニティとの直接的交流を促す観光振興策に結び付ける手法について述べている。これは大学教育の視点から考えるべきアプローチである。

自由論題G　モデレーター：若林　一平（文教大学名誉教授）

「日本の原発と原爆」をめぐって四人の発表者からの発表そして質疑が行われた。

＜日本の原爆と原発における専門職業人の社会的責任とは＞ 若林一平（文教大学名誉教授）

原発事故における責任逃れのための隠蔽という悍ましい文化の起源は帝国日本の原爆開発にまで遡る。今なお専門職業人の責任は重い。

＜核権力と文化―占領体制下における広島・長崎の「復興」を事例に―＞桐谷多恵子（きりや たえこ）広島市立大学・広島平和研究所・講師

復興とは失われた人間の生活の場を再び創り上げていく行為、つまり生きる意欲を再び 喚びおこす活動であると考える。生活の場における復興は、歴史、政治、社会、経済、 法律、文化などの多角的な視点から分析されるべきである。 広島と長崎で文化の多くが焼き尽くされた際に、どのような「復興」を模索したのか。戦後においてどのような文化を創り出してきたのか。長崎では米軍が原爆報道に関して厳しくプレス・コードを行い、核の権力を行使していきながらも、その核権力が文化と関わり合うことで、円滑な占領政策を進め得た要因を分析検討した。

＜「負の公共性」論を乗り越えるために…～基地と原発が表象する中枢―周辺関係から「私たちの公共性」作りを考える～＞奥田孝晴（文教大学国際学部）

公共という言葉とは逆に、共に生きていくことや、地域づくりのために一緒に働く、という市民社会の真の公共性が侵されていくのがこれまでの常だった。原発事故や米軍基地問題が教えてくれたのは、そうした状況への疑問、「暴力と文化のアメリカ」（白井聡）に従属してきた戦後日本社会のあり方がもう続かないかもしれないという予感、そして今までとは違った新しい考え方、生活のスタイルを考えなければいけない。

＜「原爆を読む・原発を観る」＞川村湊（法政大学 国際文化学部 教授）

原発被害を映像化することは比較的多く行われてきたが、それに対する批評や論評、あるいは研究は手薄である。原発事故にまつわる文学作品、特にエンターティンメント作品についても、その批評的研究は少ない。原爆に関する映画、原発に関する文学的表現を検証し、原爆と原発に関する表象的な探究の第一歩としたい。杉浦茂、白土三平、中沢啓治、勝又進、竜田一人、赤塚不二夫、曽根冨美子、らの作品について論じた。

＜質疑＞

桐谷報告について。浦上とバチカンとの関わり、浦上天主堂を遺構として残す方針も存在したとの指摘があった。長崎の国際文化と関連して山下俊一長崎大医学部教授の原爆と原発との関わりについて問題提起があった。

奥田報告について、社会問題への学生の主体的参加の契機と動機付けについて討議があった。川村報告について、文学作品には研究者が見落としている深い戦争批判があるとの発言があった。若林報告について、高見順の「新型爆弾」の記録に注目すべしとの指摘があった。

編集後記

このニューズレターが皆様の手に届くときには、すっかりと涼しくなり、夕暮れはどんどん早まっている時期でしょう。昔から秋が一番好きな季節でしたが、年々忙しくなっています。今年度の報告書、来年度の計画や予算申請、卒業論文の指導など。難しい気持ちで秋を迎えるのは私だけでしょうか？

みなさまにとって、今年の秋が読書の秋、食欲の秋などといった、少しでも風情のあるものでありますように。天高く馬肥ゆる秋を満喫できますように！

（日本国際文化学会事務局　W.A.）